

周縁と他者・外部

— 相違と類似性 —

小 田 淑 子

Periphery and the Other: their similarity and difference

ODA Yoshiko

This paper discusses meanings and possibility of “the peripheral approach” in our project of The Cultural Interaction in East Asia. This was originally applied by Keiich Uchida who named his own study of Christian missionaries’ studies of Chinese language as “a peripheral approach to Chinese language.” Since our project has started, the word “periphery” is, however, applied to minority groups in regional, cultural, ethnic, religious senses who live within East Asia. They are also of objects of our studies in most cases, though Chinese Muslim scholars’ study of Confucianism can be exceptional. Compared with this case, Christian missionaries can be adequately called the outsider or the Other of Chinese culture, and also were of scholars, studying subjects.

Both “periphery” and “the other, outsider” are crucial to our study of the Cultural Interaction, but these concepts have not yet been clearly defined. Considering their similarity and difference in various particular cases, and also reviewing the heritage of the Oriental studies by Western scholars, I discuss how we should develop the peripheral approach in our project in order to contribute to a new advanced study of East Asian cultures.

キーワード：方法論、中心と周縁、東洋学、オリエンタリズム、他者

(1) 問題意識

今回の研究集会のテーマは「周縁からみた中国」であるが、周縁とは何か、その概念は依然として曖昧で多義的に用いられている。周縁という用語がこのプロジェクトに採用されたきっかけは、内田慶市氏が「中国語とは何か」を問うのに、キリスト教宣教師たちによる中国語研究に着目し、それを「周縁からのアプローチ」と名づけたことによる。だが、現在、このグローバルCOE東アジア文化交渉学で議論されてきた「周縁からのアプローチ」には、東アジア地域内に存在し、広義の東アジア文化に帰属するさまざまな「周縁」が含まれている。キリスト教宣教師による中国語研究と域内の周縁とには、二重の相違が介在する。第一に、宣教師による「周縁からの」研究は「研究主体（ないし研究方法）」が

周縁であるのに対し、東アジア域内の「周縁」はどちらかと言えば、研究主体であるよりは「研究対象」である。第二に、宣教師は他言語、異文化、他宗教に属する「他者・外部」という性格が強いが、域内の「周縁」は東アジア文化に帰属する点で、単純な他者ではない。

周縁はしばしば指摘されるように、中心と対をなす概念であり、その意味では一定の枠内（ここでは東アジア域内）に位置づけられる。他者・外部はその枠外、域外に存在する。このように一応両者の相違を挙げることはできるが、中国にやって来て定住し、布教目的としても、中国語研究を行った宣教師は、文化交渉の渦中に入り込んでおり、中国社会の「周縁」の一つであるとも言える。このように、周縁と他者との共通点は多く、両者の相違は程度の差であって決定的ではない。また、「他者」概念は安易に用いると、民族対立などを扇動する危険をはらんでいる。こうした問題を考察し、当面の問題である「周縁」をより明確にすることを試みたい。

(2) 「周縁からのアプローチ」

「周縁からのアプローチ」は、周縁という用語に研究方法という意味が含まれている印象を与える。以前の議論で少し問題提起されたことがあったが、少数民族民族や宗教、その他の集団、社会階層など何であれ、周縁と呼ばれる存在が、研究主体なのか研究対象なのか、明確に規定されていない。

文化人類学が経験したように、以前は欧米人の研究対象に留まっていた無文字社会の人々が二十世紀半ばから研究主体として登場し始めた。オリエンタリズムやポスト・コロニアリズムのように欧米研究者の自文化中心主義を批判する人々の一部には、各文化の当事者にのみ自文化を語り、分析し考察する資格があるという主張もあるが、当事者以外の研究者を排除することに正当な理由はない。当事者とは異なる視点から異文化や他宗教を理解し分析することは可能であり、むしろ大事である。当事者ではない研究による「周縁からのアプローチ」は、従来の「中心」を自明の前提とする研究や中心的価値観を相対化し、周縁へのより深い、時には共感的理解に立脚した研究の可能性を含んでいる。

東アジアの事例にそって考えると、佐藤実氏が示すように、中国人ムスリムは中国に伝統的な三字文形式で教義を表現し、儒教との比較研究も行ってきた。これは、儒教文化を一つの顕著な中心とする中国における、周縁に属する当事者からのアプローチの事例である。このように、周縁が研究主体として登場する研究は存在したし、今後も歓迎すべきである。しかし、本プロジェクトの現状に限れば、多くの研究者は周縁の当事者でなく、周縁を研究対象とする研究者である。「周縁からのアプローチ」には、「周縁」の研究者が周縁を中心との比較や歴史的関係など、何らかの方法で研究する研究も含まれることを、改めて確認したい。

(3) 東洋学の伝統

宣教師による中国語研究は東洋学（Oriental Studies）の一端をなす。東洋学は近代ヨーロッパで成立した学問で、主に文献に基づく言語、文化、歴史、宗教・思想研究をいう。アジア諸地域の無文字社会（いわゆる未開宗教・社会）の研究は民族誌（文化人類学）が扱った。東洋学は古代オリエン特研究

やイスラーム研究を含むが、主流は中国学とインド学・仏教学である。東洋学はヨーロッパ人の東洋への関心から発展した。そこにエドワード・サイードが批判したヨーロッパ自文化中心主義が潜んでいたことは事実だが、文献研究の基礎は東洋学で築かれ、その成果のすべてが価値を失ったのではない。

東アジア文化交渉学を展開する際に、ヨーロッパで成立した東洋学の影が見え隠れする。東洋学はヨーロッパ語を母語とする主にキリスト教徒、一部ユダヤ教徒が行った研究で、他者によるアジア研究である。二十世紀後半以後の日本、韓国、中国のアジア研究者は、直接に欧米の東洋学の影響を意識することはないかもしれない〔研究分野による相違もあるだろう〕。オリエンタリズムによる激しい批判以後、その影響から抜け出ることを意識する研究者も少なくない。今どき、東洋学という名称を持ち出すことさえ、批判されるかもしれない。しかし、「周縁からのアプローチ」の導入のきっかけが宣教師による中国語研究であったとすれば、「周縁からのアプローチ」の一部として、東洋学という他者による東アジア研究の意義を再考し、その評価や批判も必要だと思われる。

もう一点、東洋学だけではなく、あらゆる学問研究それ自体が、研究対象にとってある種の他者という性格を帯びることも否定できない。文献研究であれ、フィールド調査であれ、自文化の研究であっても、研究するという姿勢に研究対象からの距離をとっているのではないだろうか。学問研究それ自体に他者性を内包しているなら、欧米の東洋学とそれ以外の諸分野からの研究との相違はどうか、単純に同じとは言えないと思われる理由が何なのか、研究主体が意識的、無意識的に担っている言語文化や伝統によるものなのかどうか、これらの問いは今後さらに考えねばならない。

(4) 他者・外部と周縁

周縁は一般に中心との関係を前提にするが、他者・外部は中心・周縁関係全体にとっての外部を意味する。一応、周縁と他者をこのように区別しておく。周縁が自らを積極的に中心とは異質な存在と主張する場合と、中心によって「周縁」というレッテルを貼られる場合とがある。木村自氏のフィールドワークが示す、少数派ムスリムの経堂教育という世代間伝承（再生産）のシステムは周縁であることを主体的に受け止めている事例であろう。周縁と中心との関係は様々な事情により変化することもある。周縁が中心からの離脱を志向する場合と、中心との関係を修復ないし同化しようとする場合がある。「周縁」という呼称に差別や偏見が混在する場合、さらに、離脱・同化の動きに政治的な意味や運動を伴う場合など、中心と周縁の関係は多様である。まさにそれが文化交渉学の研究対象となるゆえんである。

周縁と他者という用語の微妙な相違は、周縁が周縁に留まる、つまり中心との関係を、主体的か不承不承かを問わず、維持する場合が周縁だとすれば、他者は中心・周縁構造全体にとっての他者、他者性や外部であることを強く意識すると考えてもよいのではないか。周縁的存在が中心から離脱、離反する場合、他者化すると言える。逆に、元来の他者が移民や定着によって、当人にとっては異文化である中心的価値や構造に接近し、同化する場合、他者の周縁化も生じる。このように考えるなら、周縁と他者の相違は決定的な質的差異ではなく、程度の差にすぎないのかもしれない。周縁が含む他者性も、さらに具体例にそって広く深く考察すべきであろう。以上の考察はまだ粗く、批判を受けつつ、考え続けたい。

最後に、東アジアにおける「他者」概念の難しさを指摘しておきた。欧米の東洋学を他者による研究と認めることはそれほど深刻な問題とならない。だが、東アジア域内で誰が「他者」かという問いは非常に難しい。下手に議論すると取捨がつかなくなるおそれさえある。東アジアを自明の前提として東アジア文化交渉学が創設されたが、日本と日本人、中国と中国人、朝鮮半島と朝鮮・韓国人は互いに他者なのか、そうではないのかという問題である。東アジアが歴史的に漢字文化、儒教、仏教、道教などを共有した文化圏を形成してきたとしても、それぞれに言語が異なり、歴史も国家体制も異なり、近代以後には日本は侵略と植民地支配さえ引き起こした。「文化」交渉学であって、国際関係論や政治学ではないことを理由に、この東アジア域内の他者問題を問わないことは許されないだろう。

東アジア文化交渉学がさまざまな文化交渉を研究し、成果を挙げるなら、それは中国、朝鮮半島、日本の同質性や類似性を発見すると同程度に、いやそれ以上に、相互の相違や異質性を明らかにすることも予測される。例えば、儒教と仏教のそれぞれの社会での影響力の相違を明らかにし、その理由を考察することは望ましいことである。相互の共通性と異質性を、お互いに認識し確認できることが望ましいだけでなく、要請されている。相互に言語も歴史も異なる人々が、それぞれの自文化中心主義に陥らず、他者という面を互いに保持しつつ、互いを理解することが大事である。同じ相互理解は、むしろ周縁と中心との関係にも認められなければならない。多様な他者存在と周縁的存在を改めて発見し、認識することが、一皮むけば複雑な東アジア文化を新しく読み解くことに貢献することが望まれる。